

子供たちを支える奨学金

◆ スリランカの子供たちへの奨学金支援 ◇

2022年1月、手をつなごうアジアの立ち上げに先立ち、スリランカの子供たち2名(1名は11歳の男の子、もう一人は18歳の女の子)に月に10,000円の奨学金支援を行うことにしました。どちらの子どもも家庭の経済状況が厳しく、進学(男の子は義務教育終了後の高校進学、女の子は大学進学)を断念しようとしているということで、彼ら2人に奨学金を開始することにしました。この奨学金での支援活動が手をつなごうアジアの最初の活動となりました。

◆ 奨学金からスタートした理由 ◇



数多くある海外での教育支援を行った理由は、当時はまだ新型コロナの影響で国境が開いておらず、現地に行かなくてもアジアの子供たちのために何かできないかという気持ちからでした。結果としては、その後、男の子はスポーツと勉強に共に励み優秀な成績を維持していますし、女の子は先ごろ無事に志望大学に合格し、情報通信の学位を取得し、ゆくゆくはスリランカの

発展に貢献したいと夢が膨らんでいます。

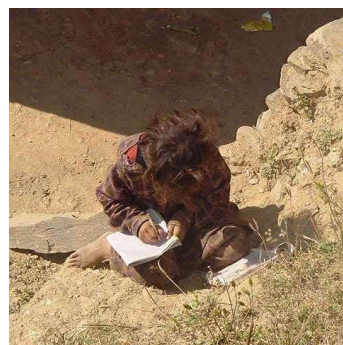
◆ 切っ掛けとなった心不全 ◇

彼らの奨学金支援の活動の切っ掛けとなったのが、2021年の心不全での入院でした。

当時は、コロナ禍の真っ只中、ゴールデンウィーク中ではありましたが、私は自宅で自粛生活をしていました。そんなある日、その日は朝から頭が重くて、昼間から寝ていてもつらくて、頭が重くて持ち上げられないという状態が夜になっても収まらず「#7119」に電話をかけました。オペレーターさんと話をしている最中、私は体調が悪化し呼吸困難に陥り、その場でうずくまってしまいました。しかし、そのオペレーターさんが救急車を呼んでくれました。救急車が到着した頃には、ほとんど呼吸ができずに立つこともままならないため、救急隊に抱えられながら病院に向かいました。

その時、私は「あ～、これで死ぬのかな」との思いが頭をよぎりました。と同時に定年後、アジアで国際ボランティアをしたいと思っていた私は、もうその夢が叶わないのだな～思い涙を流しました。情けないくらい久しぶりに本気で泣いたと思います(写真は40代の頃に会ったネパールの女の子)。

幸いにして、病院に連れてもらった私は、なんとかあの世に行くことなく帰還を果たしました(その原因が腎臓にあることが分かり、この後、1年間の透析生活と腎臓移植という生活を送ることにはなりません・・・)。



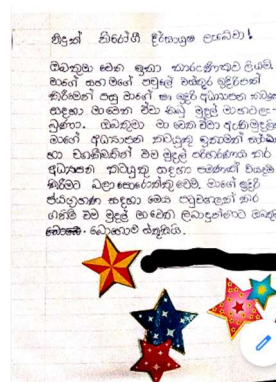
◆ 死を考えたからこそ、覚悟できたこと ◆

死に直面すると人は考えが変わることがあるというようなことはよく聞きますが、私もやはり死を目の当たりにして、やりたいことに躊躇してきた自分を見つめ直し、リスクがあってもやりたいことにトライしたいという気持ちが膨らんできました。透析生活の自分ではありましたが、どうしたら自分の夢にトライできるだろうか、そんなことを考えていた最中に、運よく私はコーチングというものに出会いました。さらに、とても信頼できるコーチに出会い、自分の夢をコーチに語り、答え、そうしていくうちに、それまでの生活を捨てても海外における教育支援ボランティアを実践していこうという覚悟をすることができたのです。

当時、57歳、自身にとっての大きな転換点となりました。

◆ 奨学生の彼らのこと ◆

奨学生の男の子は、ハリンドウ君と言います。将来はエンジニアになり親に楽させてあげたいと語ります。お父さんは軍人さんですが、兄弟が多く、生活は楽ではありません。一度は高校進学を諦めて働こうと思っていましたが、現在では進学に向けて勉強に、そしてクリケットに励んでいます。そんな彼から初めてもらったお手紙にはかわいいシールが貼ってありました。



奨学生の女の子はウマシさん。18歳でしたが、ココナッツを売って生計を立てているご家庭に育ちました。コロナ禍もあり生活は厳しい状況で、高校入学試験では高い成績であったものの大学入学試験は断念せざるを得ないと思っていました。今回の奨学金で大学入学試験に無事に合格することができました。

彼らには、将来のスリランカのためにこれからも勉強を続けていってもらいと思います。